溝下遺跡発掘調査報告書

湯野無線局建設に係る発掘調査報告

1983

（財）広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，日本電信電話公社湯野無線局建設に係る広島県深安郡神辺町湯野字溝下315－6所在遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は，㈶広島県埋蔵文化財調査センターが日本電信電話公社広島無線通信部から委託をうけて実施した。

3．発掘調査，ならびに報告書の作成は松井和幸調査研究員が担当した。

目　　次

I　はじめに …… 1

II　調査の概要ならびに遺構検出の状況 …… 2

III　出土遺物 …… 10

IV　まとめ …… 12

Fig 1　遺跡位置図
（国土地理院発行地形図「井原」1：50,000）

I　はじめに

昭和55年４月１日　広島県教育委員会（以下県教委）は，日本電信電話公社広島無線通信部（以下電電公社）から「20GHz帯無線局建設(尾道―広島間)に係る文化財等の有無ならびに取扱いについて」の照会をうけた。これは長距離の電話回線を拡充しテレビ伝送，非常災害連絡用に供するため広島から岡山をへて大阪に至る無線中継所建設に係るものであった。この照会では，尾道・広島間で23か所の候補地があったが，分布，試掘調査の結果，遺跡は発見されなかった。次いで昭和57年７月23日には同じく岡山－尾道間について（うち広島県分９か所）の照会があり，これについても分布，試掘調査を行ったが，このうち湯野局建設予定地（深安郡神辺町湯野字溝下315－６）では，弥生土器，須恵器に伴って柱穴が検出されたため遺跡であることが確認された。このため県教委と電電公社との間で，この取扱いについて協議を重ねたが，無線局としての構造上この位置を変更することは困難であったため，事前に記録保存の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は，電電公社から委託をうけた財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが，昭和57年12月上旬から昭和58年１月中旬まで約４週間にわたって行った。

なお，発掘調査にあたっては，委託者である電電公社をはじめ，広島県教育委員会，神辺町教育委員会，杉田宗明氏をはじめとする調査地周辺の人々から多大な協力をうけた。記して感謝の意を表したい。

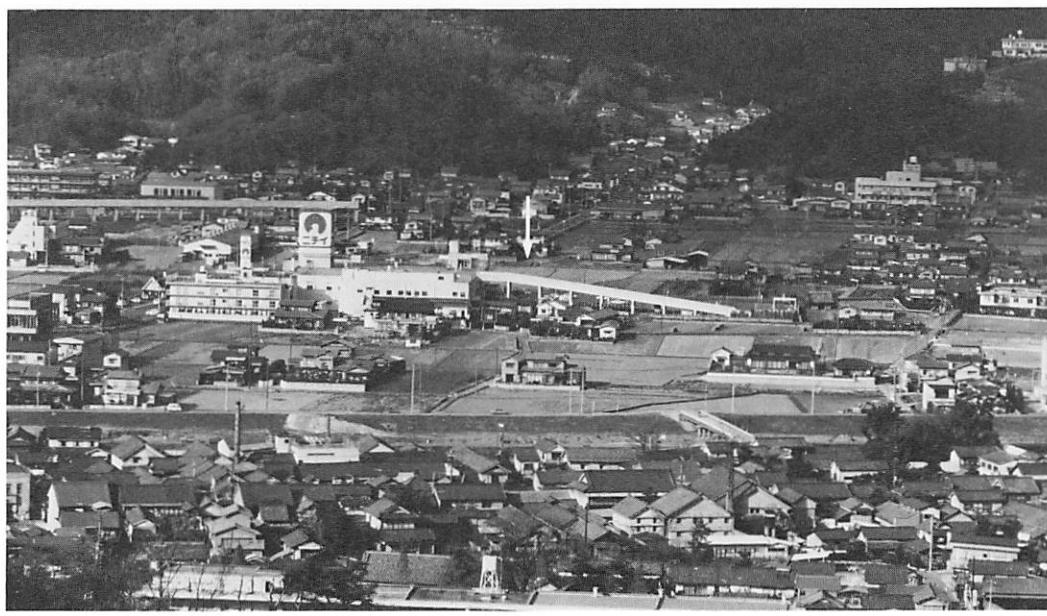

Fig 2　遺跡遠景（神辺城跡より）

II　調査の概要ならびに遺構検出の状況

遺跡は神辺町市街地の北側，高屋川右岸の沖積地に立地する。現在は水田であり，標高は11.45mで周囲の水田面よりはいくぶん低い（Fig 4）。調査対象面積は東西約16m，南北23mの区域内で約350m²である。

調査区は電電公社の設定している北側の2本の境界杭を基準として5m四方のグリッドを設定し，東西列をa～d，南北列を1～5とし，各区は両列の交差関係より1a，2bなどの名称で呼んだ。発掘調査は，試掘調査の成果によれば地表面下10数cmで遺構面が検出されていることから，耕作土の除去作業から行った。層位は，Fig11に示すように第1層暗青褐色粘質土層（耕作土）が調査区域全体にほぼ水平に20数cm堆積し，その下に黄褐色粘質土層の堆積がみられ，この層の上面が遺構検出面となっている。したがって検出された遺構はすべてこの黄褐色粘質土層中に形成されていることになるが，耕作土の直下に遺物包含層を含まずに遺構面が検出されること，および検出された遺構（柱穴）がすべて深さ10cm余りであることなどから，黄褐色粘質土層の上面はかなり激しく後世の削平を受けているものと推察される。なおこの削平は，Fig 4にみられるように周囲の微地形を利用して各水田ごとに数cmずつの段差がつけられていることから，時代は不明であるが小規模な基盤整備事業に伴うものと推定される。

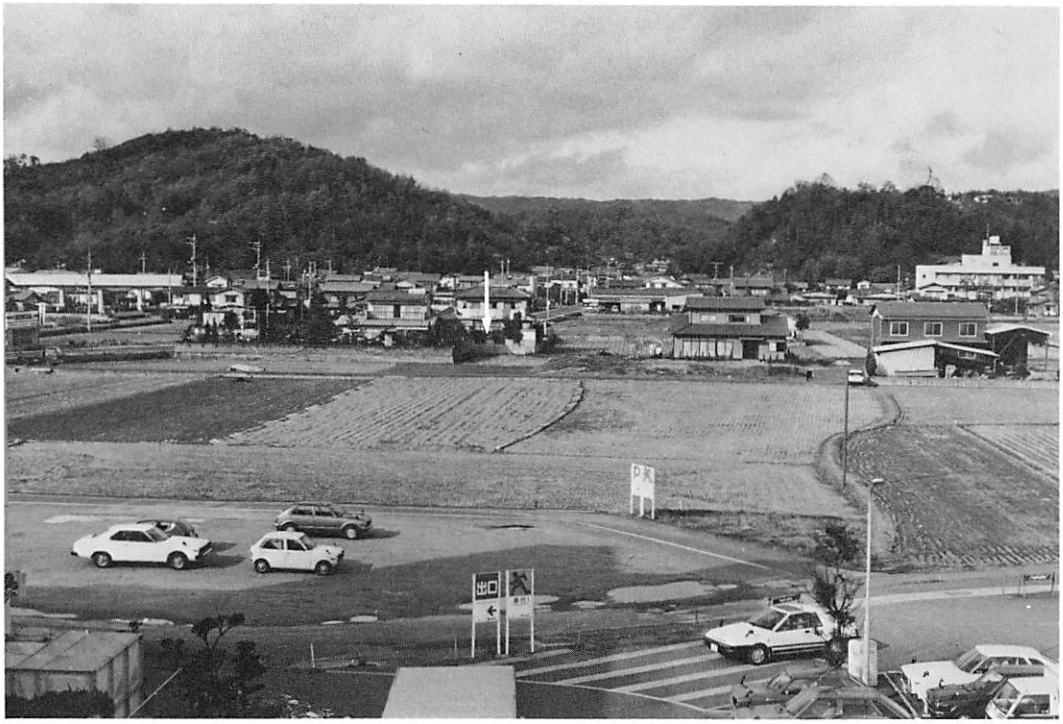

Fig 3　遺跡近景

遺構は径20～30cm余りの円形の小穴を多数検出したが，前述のようにすでに上部を削平されているため性格は不明なものが多く，また遺物を出土したものも少ないことから時期も限定できない。したがって対応するものもほとんど確定できなかったが，大部分は柱穴と考えられ，P_{11}のように2段掘りを行っているものもいくつか検出した。一応2b区から3b区にかけてほぼ南北方向の1間×2間の掘立柱建物跡を推定したが，これも穴の配列状況より推察したもので厳密には断定できない。また大部分の穴は埋土が黒褐色粘質土層であるが，P_1，P_3，P_9のみは埋土が灰色砂質土層であり，P_1やP_9の土器の出土状況などからこれらは弥生時代中期後半期の遺構と考えられる。3a区の幅20cm，深さ5cm余りの数本の浅い溝は耕作による深掘の痕跡と推察される。その他，5a区の北側隅で地表からの深さ約110cm余りで下底面がU字形に近い溝の一部を確認した。第Ⅲ層の暗黒褐色砂質土層中には土師質土器の小片がみられたが，最下層の第Ⅶ層の灰黒色砂質土層中から弥生時代前期の甕形土器口縁部破片1（Fig18－5）と土層断面に粗割りしたと推察される小片が認められた。この溝は，底面がU字形に近いことなどから人工的に掘削された可能性もあり，また小片であるが弥生時代前期の土器片も出土したこ

Fig 4　地形区分図（1：1,250）

となどから，弥生時代の前期に形成された環濠の可能性も考えられる。いずれにしろ調査対象区域外であり，これ以上の追究は不可能であったが今後検討の余地があろう。P_9底面からの土器の一括出土の状況（Fig14）に関しては，高杯はすでに破損していたものであり，また柱を建てる以前に投入されたものであれば圧力によって押しつぶされているはずであるが，それもみられないことから，現状では柱を抜き取った後にこれらの土器を一括投棄したものと推測され，特別に祭祀などに関連したものとは考えられない。これらの遺構の写真撮影，実測などの作業を終了した後，1b～5b区の西側に幅1.5mのＴ１トレンチ，さらに3a～3d区の北側にこのＴ1 トレンチと直交する同じく幅1.5mのＴ２トレンチを設定した。

その結果Ｔ１トレンチの4b区で第３層の黄褐色粘質土層の上面でFig16－１～３の縄文時代後期の土器が出土した。土器の出土した周囲を精査したが遺構などは検出できず，土器の出土状況などからも，これらの縄文土器は集落地から流出したものと考えられる。神辺町内では他に御領遺跡や大宮遺跡などでも縄文時代後，晩期の土器の出土が報告されており，神辺町内の弥生時代の生活面が分布する沖積地の下に広範囲に縄文時代後，晩期の生活面が広がっていることも推察される。

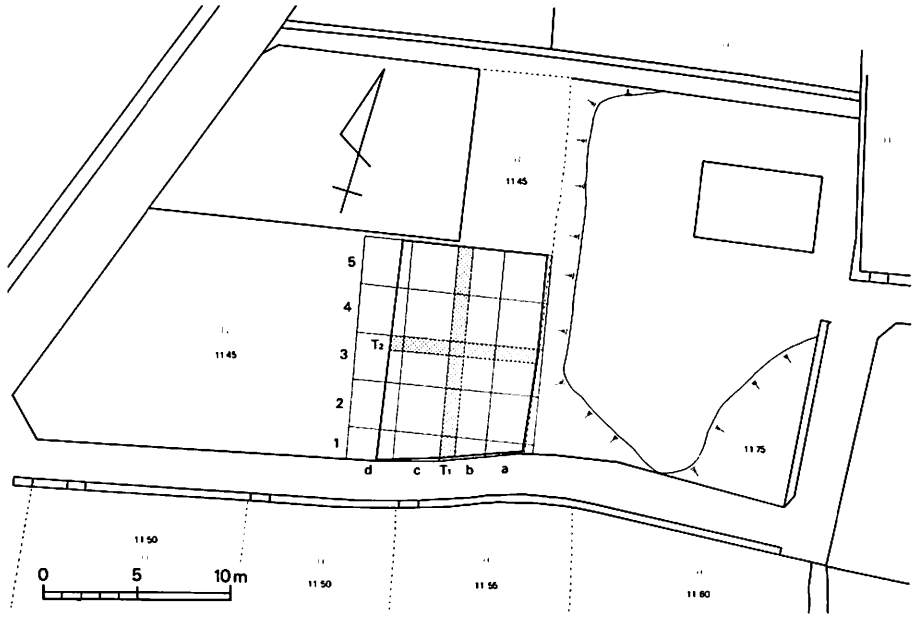

Fig 5　地形図（１：400）

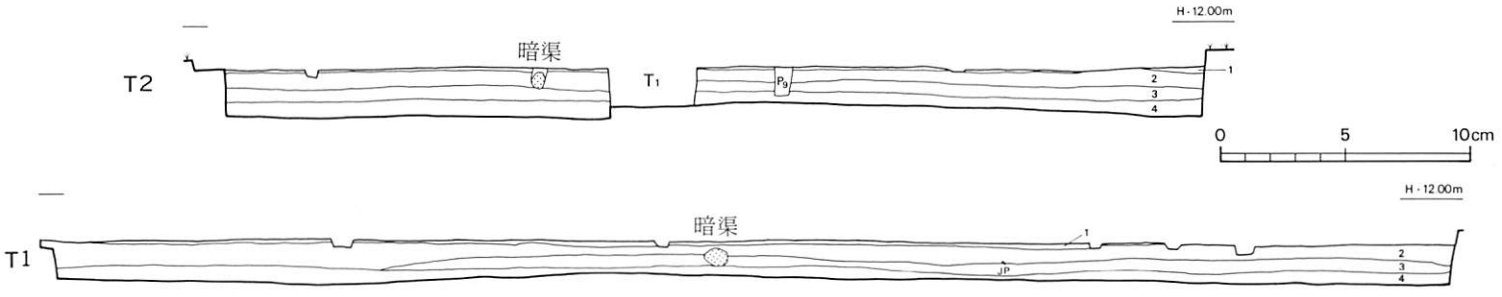

Fig 6　T 1，T 2 セレクション図（1：120）　　1　暗褐色粘質土層　　2　黄褐色粘質土層　　ＪＰは縄文土器
3　黄褐色粘質土層（漸移層）　　4　暗青褐色砂質粘土層

Fig 7　T 1トレンチ

Fig 8　T 2トレンチ

Fig 9　遺構検出状況（南より）

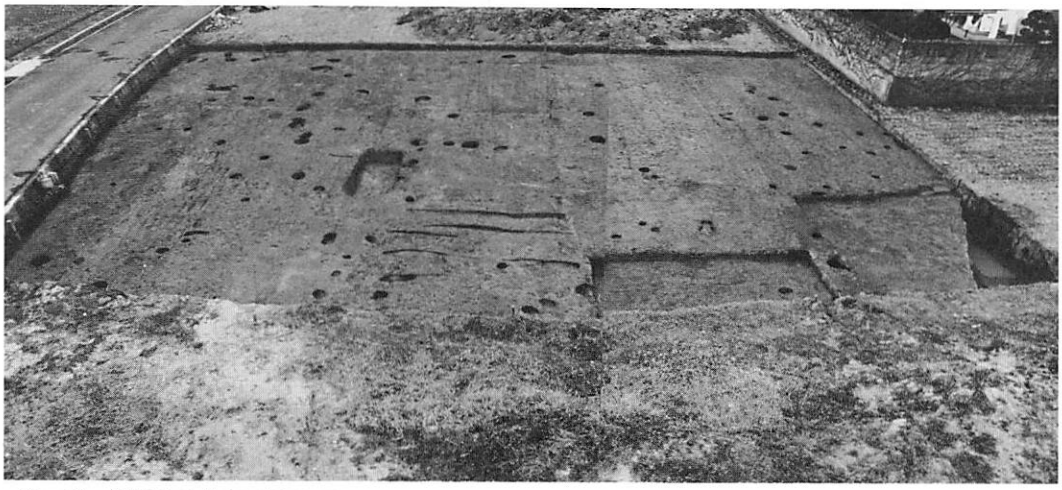

Fig 10　遺構検出状況（東より）

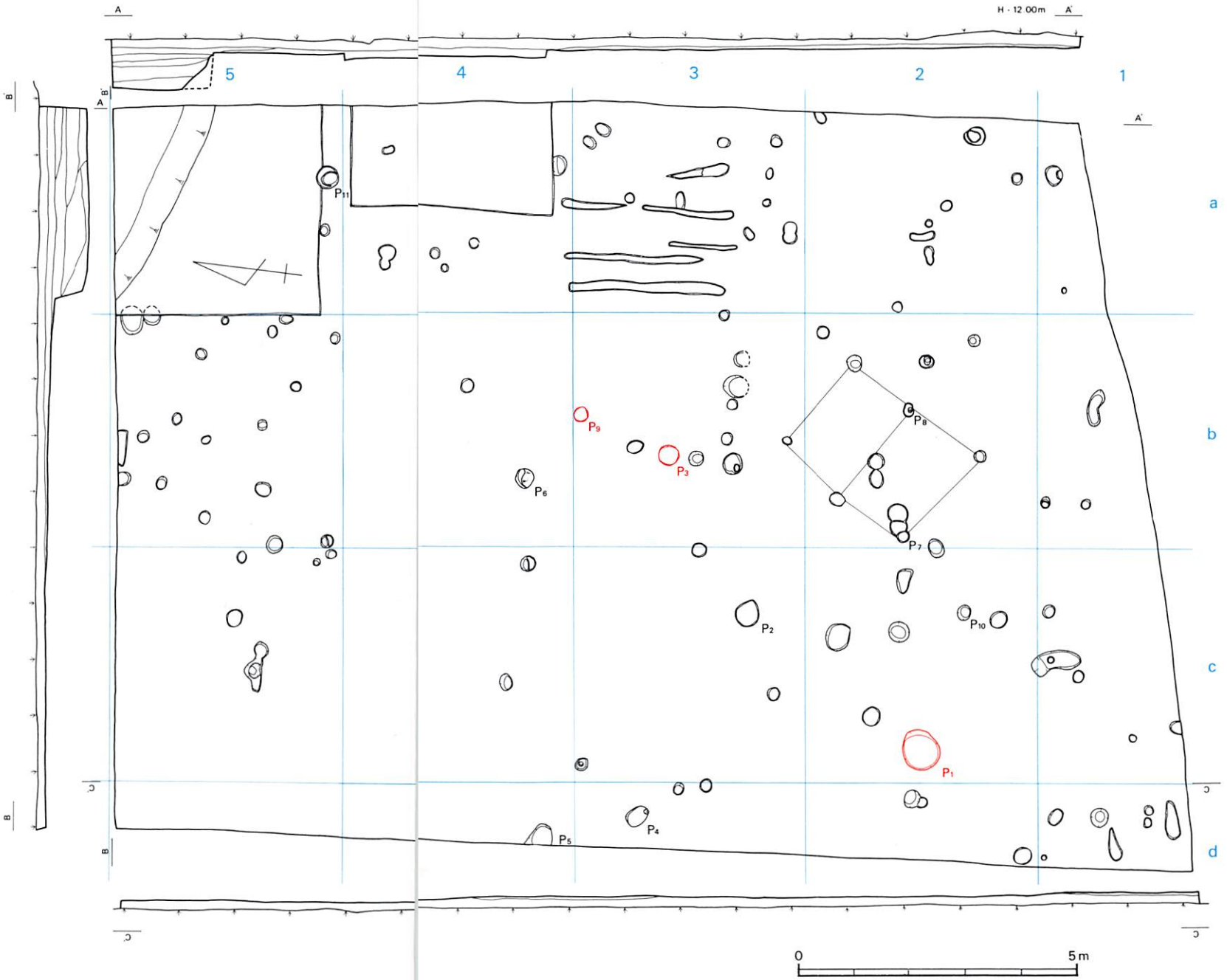

Fig 11　遺構配置図（1：100，青は弥生時代中期，ピット番号は記述上必要なもののみ付した）

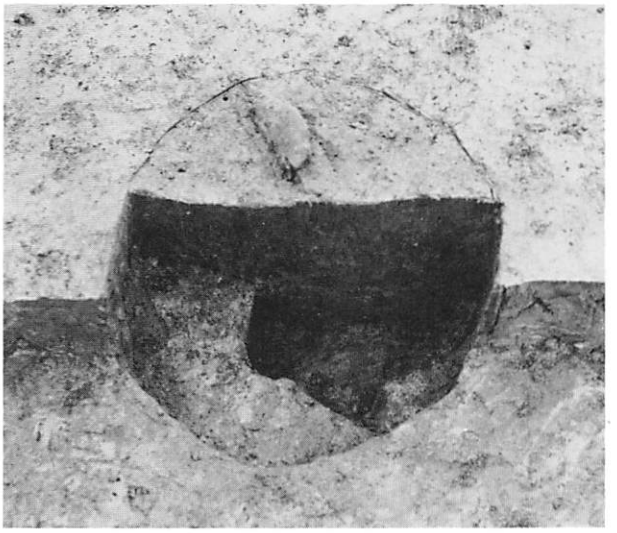

Fig 12　P11 検出状況

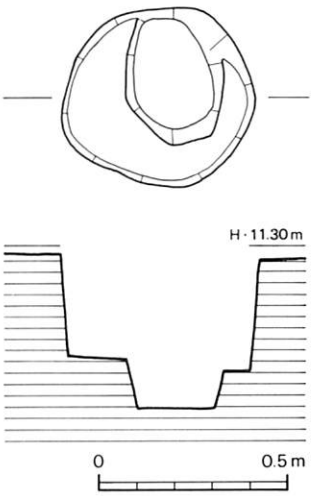

Fig 13　P11 実測図（1 ：20）

Fig 14　P 9 土器出土状態

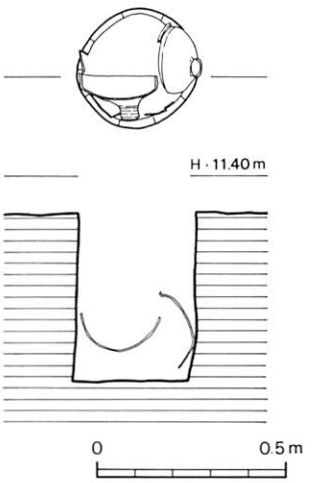

Fig 15　P 9 土器出土状態
実測図（1 ：20）

III 遺 物

縄文土器（Fig16，17）

1は復元口径23.8cmを測る深鉢形土器である。やや肥厚した口唇部から垂直気味に立ち上がった頸部にいたり，外側へ球形に強く張り出した肩部を有する器形をとる。口縁下部と口頸部から肩部への移行部には，先の丸い棒状のものによると推察される2条の沈線と，U字形と短い直線状の沈線によって施文された文様を施し，横方向の条痕調整による器面調整を行っている。なお，口唇部及び肩部以下にはＲＬの斜縄文を施している。外面は淡黄褐色，内面は淡黒色を呈しており，胎土中には1～2㎜大の長石，石英粒を含むが比較的精緻であり，焼成は良好である。2，3も同様深鉢形土器口縁部破片であり，2は口縁部が山形状に外部へ張り出している。黒褐色を呈し，胎土中には細砂粒を多く含むが焼成は比較的良好である。3は蒲鉾状に張り出した口縁部に，沈線とＬＲの斜縄文による磨消縄文帯を有する。淡黒褐色を呈し，胎土中には1～2㎜大の細砂粒を多く含むが焼成は比較的良好である。

弥生土器（Fig18，19－1～11）

1～4はP_9内一括出土土器である。1は浅鉢であり，口径12cm，胴部最大径19cm，高さ11cmを測る。口縁部は頸部から強くく字状に外反し，端部は断面三角形状に上方へ張り出している。底部は高台状の貼付けによる粘土帯をつけ，上底としている。内外面はいずれも表面がかなり磨滅しているが，刷毛目調整の後ナデ調整を行っていると考えられる。暗赤褐色を呈し，胎土は精緻，焼成は良好であり，全体につくりは丁寧でしっかりしている。2は高杯の杯部である。口径25cm，杯部最大径25.8cmを測り，口縁部がゆるやかにく字状に内湾するやや深みのある器形をとる。口唇部は外側にやや肥厚し，口縁部下には3条の浅い凹線が，脚部にも浅い凹線がめぐる。内外面とも磨滅しており，調整痕は不明瞭であるが，杯部内面はナデ，外面上半部は横ナデ，下半部は横方向のヘラミガキ，脚部内面はヘラケズリ調整によるものと考えられる。なお製作方法は，杯部と脚部を一度に製作し，後に杯部底に粘土塊を充填するという方法をとっている。暗赤褐色を呈し，胎土は精緻，焼成は良好である。3は口径12.2cm，胴部最大径16.9cm，推定高19.7cmを測る甕形土器である。肩部があまり張り出さない丸みのある胴部から内面に明瞭な稜線をもって強く外反する口縁部がつき，口縁端部は上方へ強くく字状に曲折した器形をとる。口縁部外側には浅い痕跡程度の沈線が2条めぐる。なお口縁下端部はかなり強く下へ張り出している。器面調整は，外面上胴部が縦方向の粗い刷毛目，下胴部がヘラミガキ，内面は上胴部以下ヘラケズリ調整を行っている。暗赤褐色を呈し，胎土は精緻，焼成は良好で，器壁も薄く全体に丁寧なつくりである。4はほぼ3と同様の器形をとると推察される甕形土器口縁部破片であり，口径は3よりも若干大きくなると考えられる。器面調整は，外面が縦方向の細かい刷毛目，頸部内面はやや粗い刷毛目調整である。暗褐色を呈し，胎土は精緻，焼成は

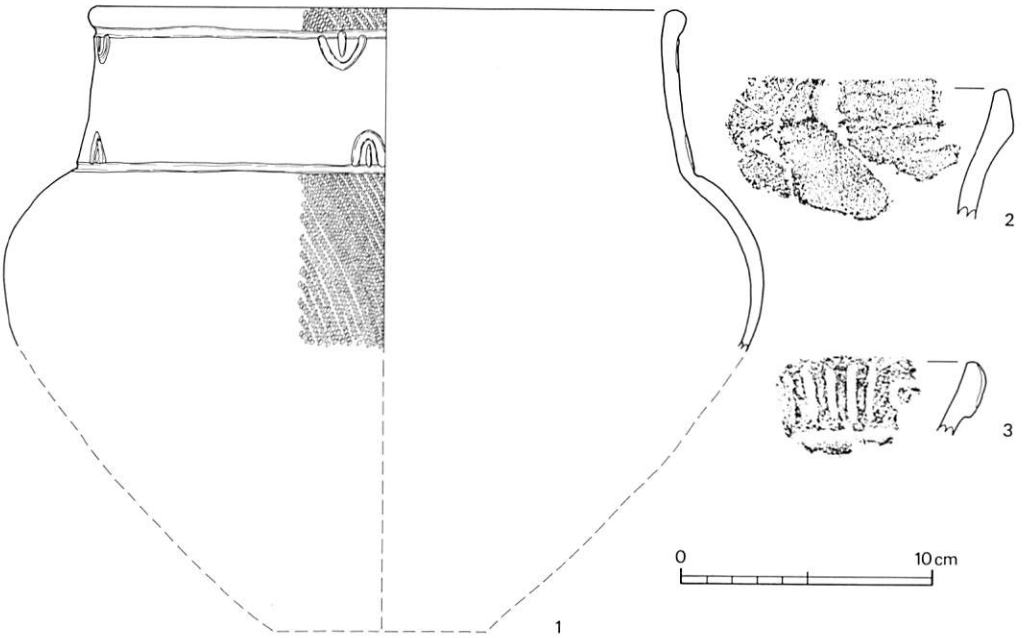

Fig 16　縄文土器実測図（1：3）

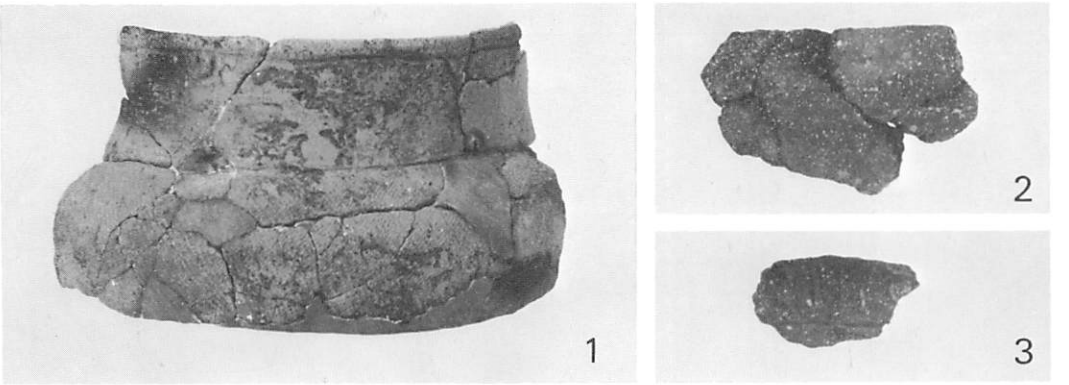

Fig 17　縄文土器

良好である。5は5a区溝東壁セクションの第VI層出土弥生前期甕形土器口縁部の小破片である。口唇外面には細かい刻目を有し，口縁下部には数条の沈線がめぐるものと推察できる。6は2c区P_{10}出土の甕形土器で，全体の約半分の破片である。推定口径23.3cm，胴部最大径26.5cmを測り，3と類似した器形をとる。内外面とも磨滅しており，器面調整は不明瞭であるが，外面上胴部は横あるいは縦方向の刷毛目調整，下胴部は縦方向のヘラミガキ，内面は縦方向のヘラケズリと推察される。暗黒褐色を呈し，胎土は精緻，焼成はやや不良である。7，8も甕形土器口縁部の小破片であり，7は2b区P_1，8は5b区耕作土中の出土である。9は2b区P_1出土の小形の脚台である。脚端部外面に浅い凹線が2条めぐる。器面調整は外面が横ナデ，内

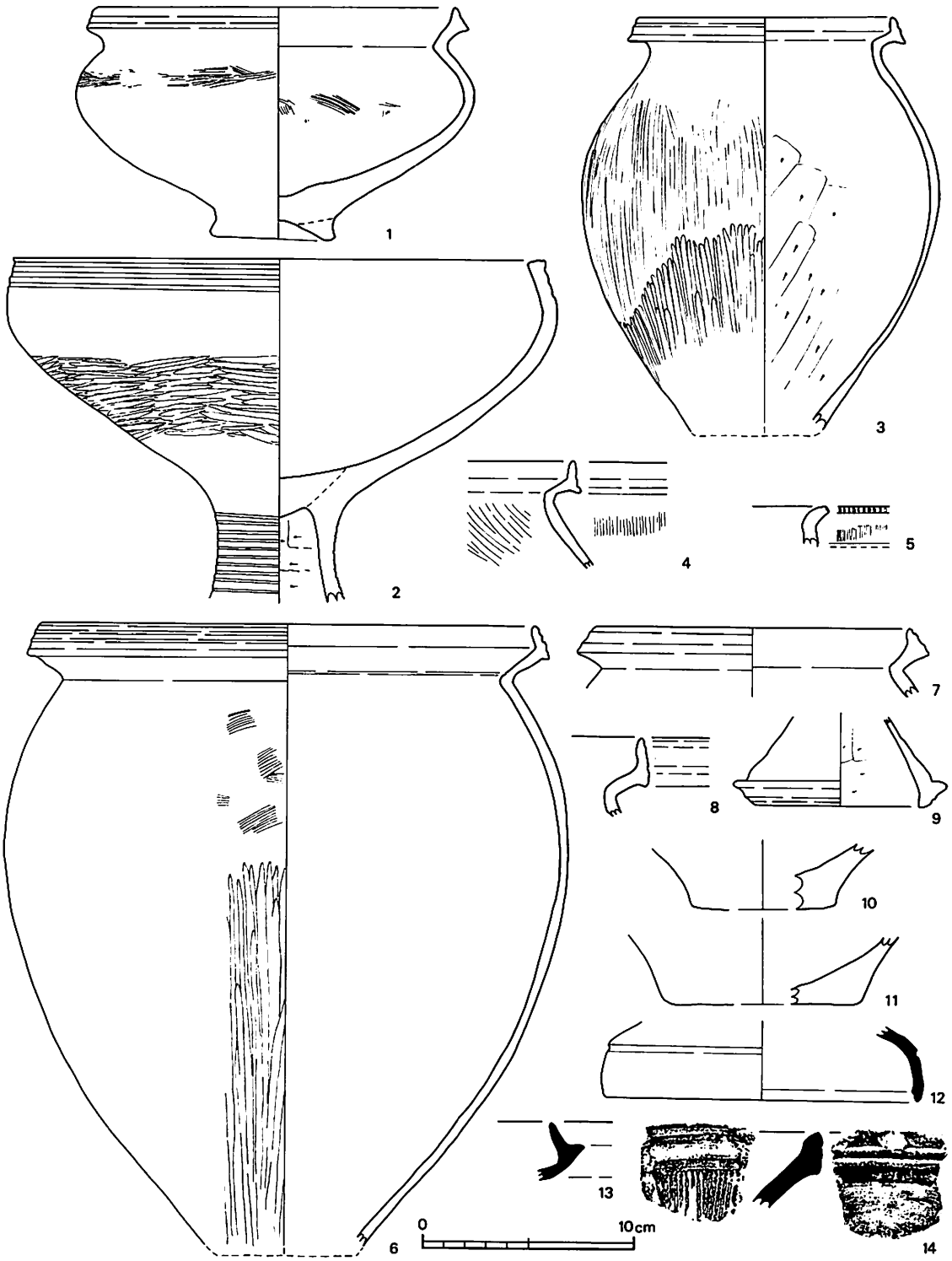

Fig 18　弥生土器，須恵器実測図（1：3）

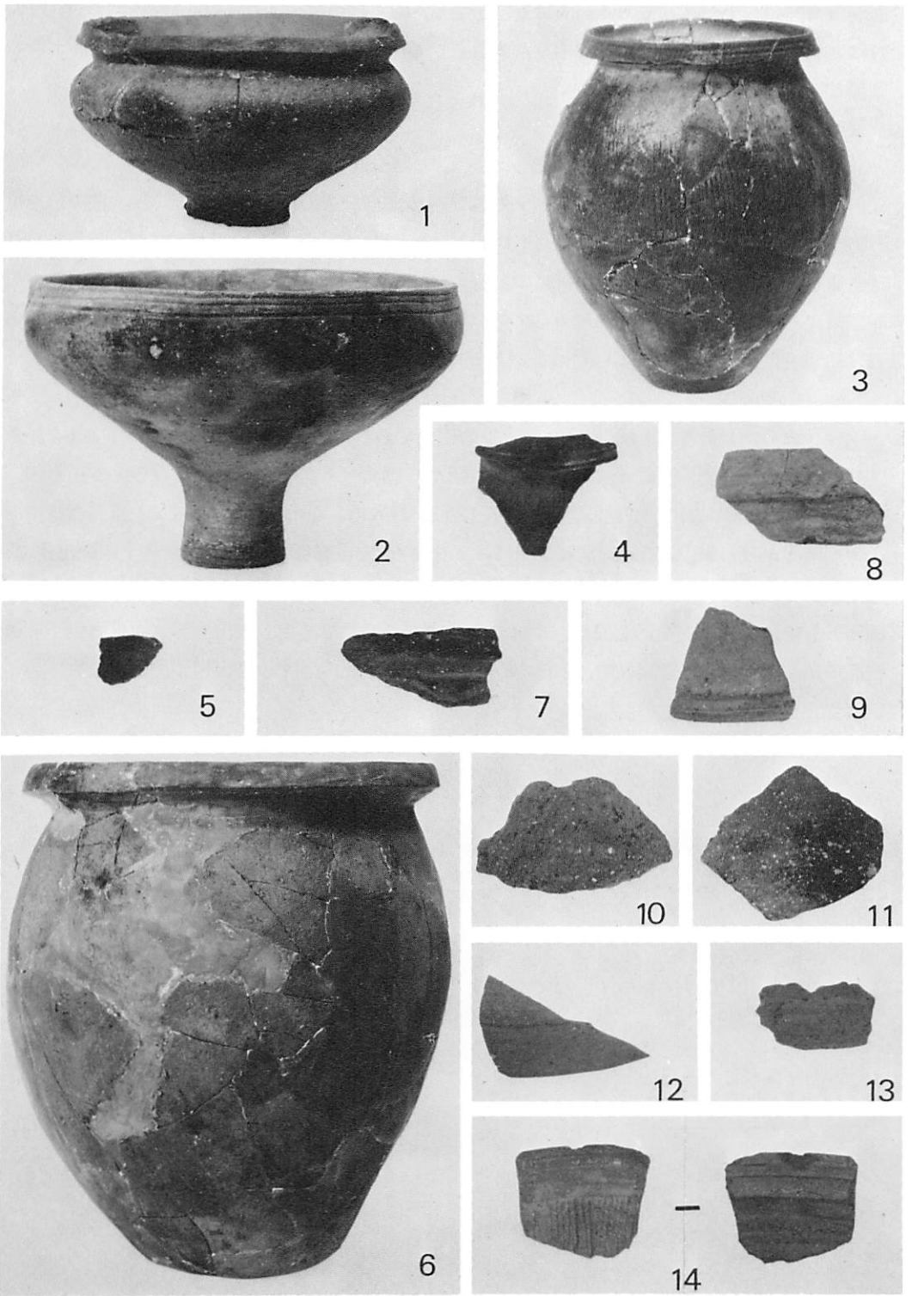

Fig 19　弥生土器、須恵器

面が横方向のヘラケズリである。淡黄褐色を呈し，胎土は精緻であり，焼成は良好である。10，11はいずれも弥生土器底部破片であり，大きさから推定して比較的大形の甕ないし壺形土器の底部と推定される。

須恵器（Fig18，19－12～14）

12は２ｂ区Ｐ１出土の杯蓋破片である。推定口径15cmを測り，口縁部は垂直に下がり，端部内面には浅い段を有する。口縁部と天井部との境には一条の沈線を有している。青灰色を呈し，胎土は精緻，焼成は良好である。13は同じく2b区Ｐ1出土の坏身小破片である。たちあがりは内傾し，端部は丸い。受部は水平にのびる。14は４，5b区耕作土中出土の須恵質の摺鉢の口縁部破片である。赤褐色で，口縁外部のみは青灰色を呈する。時代的には古墳時代のものである。前２者に比べかなり新しいものといえる。

石器（Fig20，21）

１～３は石鏃である。１は4a区耕作土中の出土であり，全長2.3cm，最大幅推定1.8cmを測る凹基無茎式のもので，逆刺が強く外側へ張り出す。両面とも調整剥離面よりなる。安山岩製。２は5c区耕作土中の出土であり，推定全長2.2cm，最大幅1.4cmの凹基無茎式で，実測面は中央に大剥離面が残るが，他面は調整剥離面のみよりなる。安山岩製。３は5b区耕作土中の出土で，推定全長２cm，最大幅1.6cmを測る平基無茎式で，側辺はややふくらみをもって基辺にいたる。両面とも中央部に大剥離面を残し，全体にやや雑なつくりである。安山岩製。４は石包丁の破損品である。穿孔は両面穿孔で，２孔の心心間距離は2.5cmを測る。安山岩製で破損は大きいが研磨などは良好である。

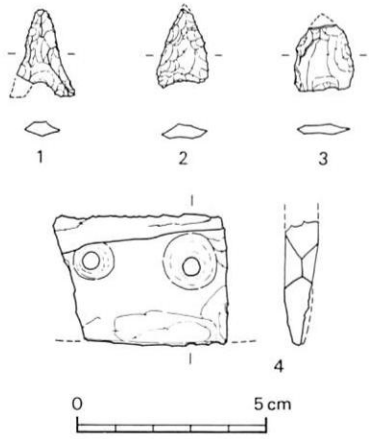

Fig 20　石器実測図（１：２）

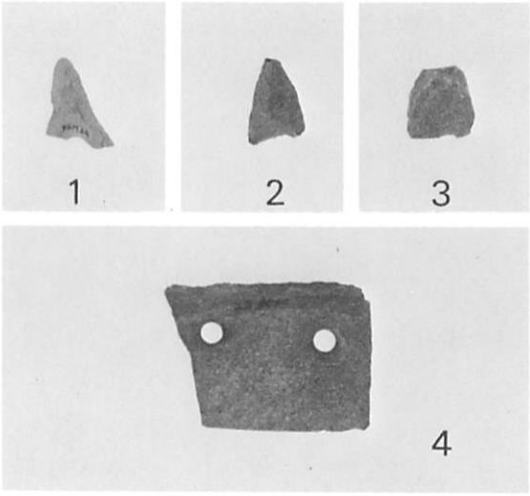

Fig 21　石　器

IV まとめ

以上溝下遺跡の発掘調査成果についてその概要を述べてきた。調査対象面積が350m²余りであり，また既述のように遺構面がかなり大きく後世の削平を受けているので検出した遺構の性格まで十分論述するにはいたらなかった。しかしながら大部分のものが柱穴と考えられ，遺物も弥生時代前～後期，古墳時代，中世にいたるまでのものが出土していることから，当該期の集落遺跡が存在していたと推定される。なお 5a 区北側で検出した溝はごく一部分を検出したのみであり，人工的なものか自然のものかの判断は避けたいが，もし人工の溝であれば，大宮遺跡と亀山遺跡の間に位置し，今後，御領，大宮，亀山遺跡と分布する神辺町内の弥生時代環濠集落に新たな資料を付加することとなろう。

出土遺物に関しては，特に P_9 内出土の 4 個体分の弥生土器が当地域における弥生土器の編年研究上重要な意義を有しているといえる。これらの一括出土土器は，Fig18－2 の高杯の口縁部や脚部の凹線の特徴，あるいは同 1，3 の鉢，甕の口縁部のつくりなどから弥生時代中期後半に位置づけることができよう。特に当地域では弥生時代中期から後期にかけて土器の形態や製作手法上の区別が不明瞭であり，また当該期の土器の一括出土や完形品の出土例が少なかったことなどから，土器の編年上弥生時代中期と後期の境を明確に区分することができなかったが，今回の資料は従来の欠を補う意味で非常に貴重な資料といえよう。縄文土器に関しては，Fig16－1 は全体の文様構成から後期後半期のもので，従来の瀬戸内海沿岸の編年にしたがえば，彦崎KⅡ式の範疇に入るであろう。

最後に遺跡地周辺の地形について若干述べてみたい。Fig4 は現在の水田の標高を測定し，その高さを10cm単位に区分したものであるが，この図でみると，遺跡は大まかには東側から西側へのびる微高地の末端部に位置することが理解できる。特に遺跡南東方向の現在の集落が存在する標高11.80m以上の微高地上には古墳時代の須恵器の破片が多数散布しており，当該期の集落の存在が推定され，今後の調査によって解明されることを期待したい。

今回の調査は，広範囲に発掘調査の進められている神辺町内においても過去に調査例がなく遺跡の実態がほとんどわからなかった深水川西側地域におけるものであり，今後予想されるであろう同地域周辺部における発掘調査に対する指針となったという意味において，数々の貴重な資料を提供してくれたといえる。

溝下遺跡発掘調査報告書

昭和58年3月31日

編集・発行　(財)広島県埋蔵文化財調査センター

印　　刷　至誠堂印刷株式会社